

三重大学 海女研究センター だより vol.9

三重大学海女研究センター
(三重大学人文学部総務担当)
☎059-231-6991

今回は、漁業の振興に関する取り組みを紹介させていただきます。

鳥羽市の漁業の状況

鳥羽市の沿岸域は生産性が非常に高く、多種多様な魚介類が育まれています。豊かな海洋生態系に支えられ漁業が盛んですが、近年は海域の環境も変わってきており、漁業への影響も大きくなっていると感じています。

鳥羽市沿岸にはまだ多くの藻場が残されていますが、アカモクやテングサなど減少している海藻もあります。海藻類以外では、クロアワビやイセエビなどの漁獲量が一部の海域で増加傾向にありますが、マダコやマナコなど多くの魚種で漁獲量が減っています。養殖業に目を向けますと、品質が高いことで知られる

鳥羽のクロノリやマガキの生産が不安定になっています。

海洋環境の変化

鳥羽市の海域で起こっている環境の変化として、水温の上昇と栄養塩の減少があります。地球の温暖化に伴う水温上昇に加え、5年前から続く黒潮大蛇行の影響で年平均水温が約1℃上昇しました。これは陸上の3〜4℃上昇に匹敵すると言われていています。また、鳥羽市の海域の栄養塩は伊勢湾からの供給によって支えられています。その伊勢湾の栄養塩濃度は低下傾向にあります。栄養塩の減少は、海藻類の生育に悪影響を及ぼし、また植物プランクトンの減少と、それによる動物プランクトンの減少へと影響が広がります。魚介類の餌不足を引き起こします。

三重大学水産実験所の研究

三重大学水産実験所では、海洋環境の変化の状況把握に努めるとともに、藻場への影響を調査しています。また、サワラやアワビ、ナマコなど重要な水産生物を取り上げ、

それらへの影響の調査を進めています。地球規模の環境変動に対応するのは困難ですが、少しでも藻場を守り、水産生物を増やすことにつながる成果を得て、鳥羽の漁業の振興に貢献していきたいと考えています。三重大学では、伊勢志摩地域の一次産業に関わる自治体や企業・団体のみならずと連携するため、大学の地域拠点である伊勢志摩サテライト「伊勢志摩産業振興教育研究センター」を水産実験所がある小浜町内に設置し、技術相談や支援を行っています。漁業など一次産業の生産現場で困ったことがありましたら、このセンターに気軽に相談してください。



三重大学水産実験所 (小浜町)

鳥羽・海藻文化革命 岩尾博士の 海藻博物記

vol.29

～藻場の芽生え～

水産研究所 ☎(25)3316



海藻の群落はその海域から衰退、あるいは消失してしまう現象のことを「磯焼け」と呼ぶ。古くは江戸時代以前から知られており、気候の変化や藻食動物、人間活動などの影響で自然に起こる現象であるが、時が来れば元の状態に戻ることも知られてきた。しかしながら、近年、日本各地で見られる大規模な磯焼けは深刻で、「なんでここが？」という場所ですら海底砂漠の様相を呈しており、三重県南部ではすさまじい勢いで磯焼けが進行している。漁業にとつてだけでなく、沿岸生態系、物質循環においても

大規模で長期にわたる磯焼けは望ましいものではない。鳥羽海域では、奇跡的に大規模なアラメやカジメ、ホンダワラ科海藻の群落が維持されている場所が多いが、変わってしまった場所もある。藻食魚類の活動が長期化、あるいは分布範囲が変化し、さらに5年前から続く黒潮大蛇行の影響で水温や水深にも不安定な変化が生じている。10年前は海藻の大群落が広がっていた矢張り口の海域が、現在では海藻がなくなってしまう、浮泥が厚く積もっていた。しかし、この冬に観察したところ、アラメの新芽こそ無かったが、食われて茎だけ、根元だけになっていた多年生ホンダワラ科海藻の新芽があちこちに見られた。ひとまず春には草原状態には戻りそうではある。他地域で行われている対策を安易に真似するのではなく、わが町の海の状況をつぶさに観察し、よその海との比較などお金をかける前にできることから始めたい。



2012年2月藻場：的矢湾口付近の大海藻群落。海底も美しかった。



2022年10月海底：同海域。浮泥が厚く積もっており海藻はない。



2022年12月遠景：かつての群落は戻っていないが。



2022年12月新芽：枯れた海藻から新たな芽生えがあちこちに見られた。